

巻頭言

仙山圏の交流拡大に向けて

河北新報社 常務取締役編集局長 一力 雅彦



陸奥をふたわけざまに聳（そび）えたまふ
蔵王の山の雲の中になつ

茂吉

蔵王連峰熊野岳の山頂に、宮城、山形両県を見渡すように斎藤茂吉の歌碑が建つ。

東北を南北に貫く奥羽山脈は、いくつもの川の水源であり、私たち東北に住む人たちにとって精神的なより所でもある。一方、東北の歴史は峠との戦いである」といわれるように、これまで東西の交流を阻んできた壁でもあった。

奥羽山脈を横断する東北の「横の道」が今、大きな節目の時を迎えようとしている。

東北横断自動車道酒田線（山形自動車道）は八月九日、酒田インターチェンジ（IC）から日本海に迫る酒田みなとICまでつながる。

宮城県側は現在、仙台市周辺の仙台東部道路と仙台南部道路の整備が秋の国体に向けて急ピッチで進んでおり、ともに八月一日に全線開通する。東部道路は三陸自動車道と、南部道路は東北自動車道とそれぞれ接続され、この結果、石巻や仙台空港から酒田まで、自動車専用道の月山道路を挟んで高速道路で直結されることになる。

太平洋側と日本海側という、異なる気候、文化を結ぶ新しい横断道の完成である。人と物の相互の動きが加速され、新たな観光開発や産業振興につなげようという期待も膨らんでいる。松島や石巻で日の出を見て、庄内で日の入りを見るサンライズ・サンセット交流」など広域観光ルートを検討する意欲的な動きも始めている。

アジアと北米間を結ぶゲートウェイとしての役割を求める声も一段と強まってきそうだ。

この横断道による広域連携を促進するけん引力として期待されて

いるのが、仙台、山形両市の連携である。

荘銀総合研究所と仙台都市総合研究機構、河北新報社の三者は、両市の行政マンや経済関係者らとともに連携促進策を探る「仙山圏交流研究会」を四月に設立した。

県境を挟んで県都同士が隣接するという有利な地勢的条件を生かした地域づくりについて、二年間にわたって研究・提言活動を展開していく。

本年度は仙山圏の人口、産業など社会経済構造の分析や、人的、経済的、文化的交流の現状把握など、基礎データの収集を進める。

研究会は一月月に一回、仙台、山形で交互に開催。中間総括を兼ねて、来年春に公開フォーラムを開く予定だ。

両都市を一時間で結ぶ高速バスは四月に四十往復まで増便され、利用客も年々増加を続けている。山形の大型店や外食産業などの中には積極的に仙台に進出を図っている企業もある。

通勤や通学、ビジネス、買い物、レジャー……。多様な双方向の交流が仙台と山形の間の実体としてある。

高速交通網の整備によって、自然と増加している人、物、情報の交流に、いかに広がりや厚みを持たせていくか。これが仙山圏交流研究会が取り組むテーマである。

旧建設省など六省庁が昨年三月にまとめた東北地方の「広域連携による交流拡大を通じた地域振興推進調査」は、仙台、山形両都市圏を「一体的な中枢都市圏として育て、東北全体のコアとしていく」と位置づけ、「国際交流都市圏」を整備すべきだと指摘している。

それぞれの地域が資源や文化を掘り起こし、自分たちが住むまちのどこがいいかを再認識することが連携の出発点だ。

研究会では、都市連携という地域の政策課題にとどまらず、東北の国際戦略なども視野に入れた幅広い議論を深めていきたい。